

土曜日の夕マネギ



土曜日のタマネギ

11月、街はすっかり冬支度を始めていた。
気の早い恋人たちは、クリスマスが待ち遠しくてしかたがない。
今日は土曜日——2週間前から約束。
彼が遊びに来てくれる。
このところ忙しくて、ろくに会うこともできなかった……できなかったのだと、思う。

わたしは、近所のスーパーに買い物に出かけた。
よく晴れた気持ちのいい天気、わたしの心は少しだけ弾んでいた。
「大丈夫、きっと大丈夫」
彼の心が少しずつ自分から離れているのを感じていた。
恋愛は初めてじゃない。
今がどういう常態なのかはわかっている。
客観的に見ても「まずい」と思う。

彼はとても優しくしてくれる。
やさしく包んでくれる。
わたしはそれに甘えて、甘えっぱなしで……少しばかり、浮かれていたのかもしれない。

彼はまじめ。
まっすぐわたしを見つめてくれる。
でも、わたしはそれに耐え切れずに、目をそらしてしまう。

彼の優しさはわたしを不安にさせる。
彼の純真さはわたしにはまぶしすぎる。

時々思いつめたような表情をする彼に、わたしは何もしてあげることができなかった。
だから今日は……

だから今日は暖かいポトフを作って——
作って……わたしは彼に甘えるの？謝るの？
それとも……

彼のために料理を作るのはいつ以来だろう。
去年はよく、彼の部屋に行って料理を作ってあげたっけ。

「ねえ、お砂糖どこだっけ？みりんある？」

彼のキッチンはとても整理されていて、女のわたしでも感心するほど——
でもそういう事がプレッシャーになることもあるなんて、わたしも気付かなかった。

彼はわたしが作ってあげたのと同じ料理を見よう見真似で作ってくれたこともあったっけ。
「すごい、ちゃんと肉じゃがになってるよ」
どんなことにも前向き、そしてなんでもそつなくこなしてしまう彼.....

別にすれ違いとか、そんなんじゃないの。
彼が変わったわけでも、わたしが変わったわけでもない。
でも、少し背伸びをしたたのかもしれない。
彼もわたしも——
だからちょっと疲れただけ.....ただそれだけ.....

「痛っ！」



ニンジン切る手がすべって、わたしは小指に小さな傷を負った。
「もう、バツカみたい！彼に笑われちゃうわ」

でも、本当に笑ってくれるかしら.....

そのときとっさに頭に浮かんだのは、わたしの小さな傷の跡をひどく心配そうに眺めている彼の姿だった。

そしてそんな彼を見ながら「馬鹿だなあ」と笑いながら行って欲しかったと、戸惑っているわたしの姿も……

「馬鹿だなあ……もう」

日はすっかりかげり、不安な気持ちが募り始めていた。

「来るかなあ」

きっとくる。

彼は今まで約束を破ったことはない。

どんなに遅くなっても必ず会いに来てくれた。

わたしなんかとは、ちがう……

「プルルル…プルルル…」

期待を裏切って電話のベルが鳴る。

電話に出たくない。

お願い、誰か、電話のベルを止めて……

「もしもし……」

「ごめん、俺、いけない……もう逢えない……ごめん」

「うん、わかった……じゃあ」

「えっ……あああ……じゃあ、元気で……」

「うん、大丈夫だから……大丈夫だから」

わたしは最後に嘘をついた。

部屋中の空気が静まり返る。

電話も、ダンスも、時計も……みんなわたしに気を使っているようで、心が痛かった。

ゆらゆらスープの海を 小船のように漂う
行き場のないカケラ まるでわたしの気持ちみたい
つめたい電話のせいね 火を止めるのも忘れた
踊りつかれたでしょう ため息ついたポトフ

WHY.WHY.WHY? ほほをそめて

おなかすかせた恋人を

待ちわびていたのに

みんな幸せね土曜の夜 街もはなやいでいる
どうして おまえとわたしだけ
こんな目にあうのかしら

さよならニンジン・ポテト 宇宙の果てへお帰り
胸に残り火ごと 残部捨ててきたと思ったのに
おなべの底にタマネギ ひとりしがみついている
イヤヨ、アキラメナイ！...たぶんこれがわたしね

WHY.WHY.WHY? 今夜わたし
いらぬオンナになりました
ころがる床の上

バカげた小指のバンソーコ 見せるつもりだった
いっしょに笑ってくれないの？
いつもの土曜日なのに

ひとりぼっちの晩御飯。

不思議と涙は出なかった。

「わたし、こんなに料理下手だったかなあ……」

出来上がったポトフを食べる前に、わたしの涙はすでに枯れていた。

ポトフはいつもよりも、少し、しょっぱい気がした。

もう、背伸びしなくていいんだ。

そんなことを思い出したら、また、涙が溢れ出そうになる。

「背伸びしてたわたし、バイバイ……」



「わたしは大丈夫なんだから」

精一杯の嘘を、それでもわたしは最後まで突き通そうと必死だった。

「大丈夫なんだから！」

あいつなんか

彼と出会ったのは.....去年の12月。街の中を歩けば、Wham!のラストクリスマスや山下達郎のクリスマス・イブが聞こえてくる。

「きっと、きみは、こないかあ〜」

わたしは仕事帰り、一人家路を急いでいた。

住み慣れたこの街も、気がつけば少しずつ変わってきている。

女一人でも気軽に入ることができたショットバーは前の年につぶれてしまい、駅の反対側に住んでいた学生時代からの友人も、同じ頃に結婚して引っ越してしまった。

居場所がない



もうすぐクリスマスだというのに、スケジュール張には仕事のことと、実家に帰ることしか書いていない。

「みんなあいつがわるいんだ」

別にふられたわけじゃない。わたしからおりただけ……

「あれー、そんな歌詞のヒット曲、昔なかったかなあ〜」

わたしはいつもどおりだった。

いつもどおり恋をして、いつもどおりアプローチした。

あいつは恋の駆け引きとか、遊ぶとか、そんなこととは無縁なタイプ。

すぐ手の届くところまで近づいて、お互いに見合ってしまった。

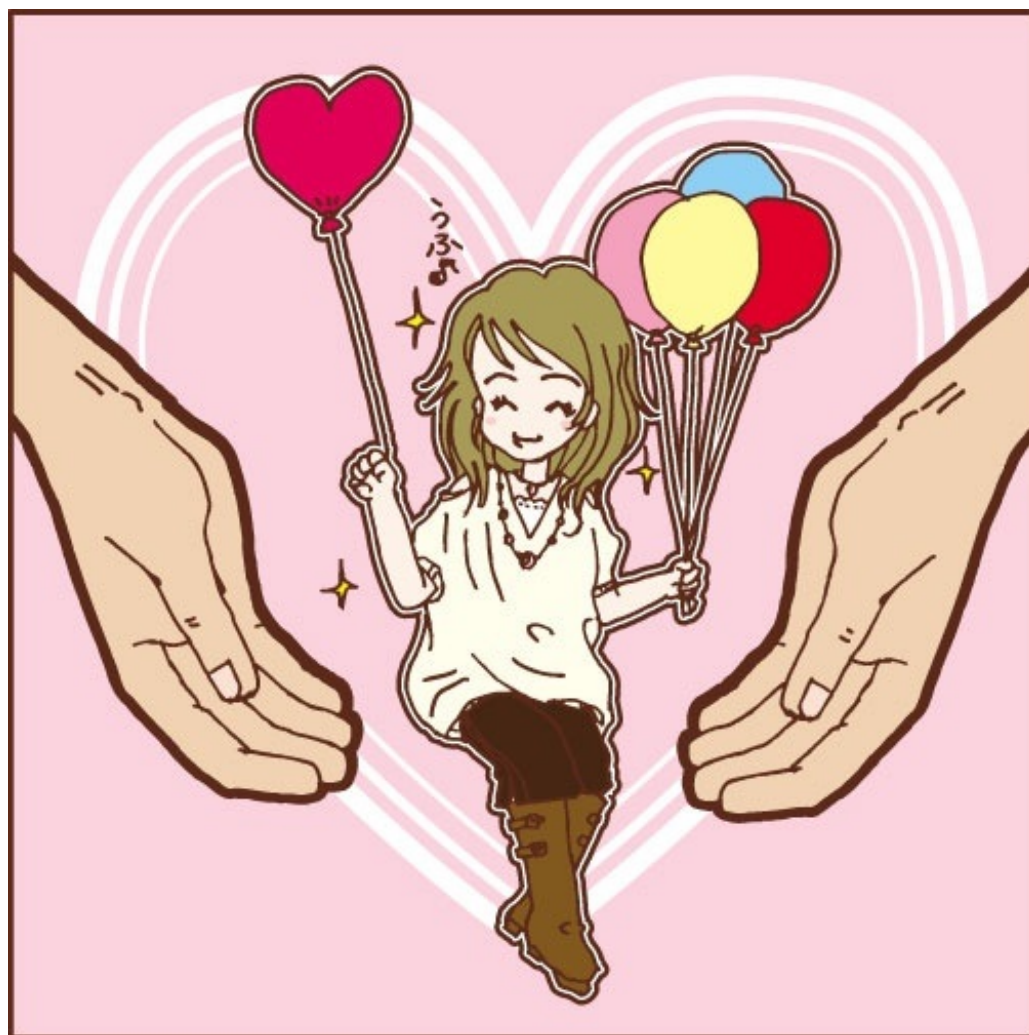
いつもなら、すんなりことは運んでいたはずなのに……あいつったらちっとも煮え切らなくて、わたしは作戦の失敗を認めつつもこのままでもいいかなあと思っていた。あの娘（こ）が現れるまでは。

妹タイプっていうんだろなあ、あーゆーの。

わたしは最初から相手に甘えたりするのはどうも苦手だったし、自分のことは自分でやりたいし、相手を束縛するのも好きじゃなかった。

何回かご飯を食べたりカラオケ行ったりして、すぐにピント来た。

この娘、あいつに気があるんだ……



あの娘はまるで風船のようにふわふわしていて、少しでも乱暴に扱おうものならすぐに壊れてし

まいそうで……だから周りには誰もがあの娘のことを『守ってあげたい』と思ってしまう。でも、彼女が守って欲しいのは『誰でも』ではなく『あいつだけ』なのはすぐにわかった。

あいつもそうだけど、あの娘も世間ズレしていないまじめなタイプだった。もし、友達になれたら、きっと彼女の恋を応援しただろう。彼女はそういう星の下に生まれたのだろうし、わたしもきっとそうなのだ。

あの二人をみていると、どうにもわたしの居場所がないような気がした。

だから、わたしは……だから、わたしは少しだけ背伸びをしようとした。

そんなとき、彼が現れた……それはまるで運命のようだったし、信じられないことに二人を結びつけたのは一本の糸だったというのは、本当の話なのだから。

ダンスはうまく踊れない

「あの一、糸くずがついてますよ」

近所のスーパーに買い物に来ていたわたしは、少しばかり高いキャベツとにらめっこをしていた。

「えっ？」

不意に後ろから声をかけられて、ビックリしたのもそうだけど、その男性が買い物カゴを床においてジェスチャーで糸くずの着いている場所を示してくれたことに、一瞬反応が遅れてしまった。

「失礼」

彼の大きな手がわたしのあたまについている茶色の糸をつまんでくれたときは、多分少女漫画の主人公が憧れの先輩に声をかけられてオドオドしているような様になっていたに違いない——思い出だけでも顔が赤くなる。



「あ一、あ一、すいませ……あ、ありがとうございます」

誤ることではないのに、あまりにも——わたしたたらかなり無防備な状態だったから——突然だったので、つい「すいません」と言いかけて慌てて言い直した。彼は糸くずをわたしに見

せて、「どうぞ」というような目でわたしを見つめた。
慌ててそれを受け取るわたし。

「キャベツ、高いですね」

それはもう、わたしの体温を上げるのに十分な素敵な声で彼は言った。

「あー、そうですね。買うかどうか迷っちゃいますよね」

「しかし、迷ってもこれしかないから……」

そうやって彼はキャベツひとたまを軽々と片手で掴み、キャベツをひっくり返して芯を眺めた

。

「うん、これにしよう。それじゃ」

そういえば聴いた事がある。キャベツの選び方——芯が大きすぎるとダメなんだっけ……そうじゃない、糸くず！なんで糸くずなんか……

「あっ……あのとき！」

夕方に打ち合わせに行ったクライアントはアパレル関係の会社だった。わたしはwebデザイナーで、そこで扱っている商品をいろいろと見せてもらったのだが、たぶん、そのときに体のどこかに着いたのか……なんにしても会社からここに着くまでの1時間弱の間、わたしは頭に糸くずをつけたまま、歩いていたことになる。なんという失態……

「あれ？糸くずは……どこ？」

わたしの手にはしっかりとその糸くずが握られていた。

「これって『運命の赤い糸』ってやつ？でも、わたしのは赤じゃなくて茶色なのね」

わたしは一步踏み出して、少しばかり高いキャベツを買うことにした。



12月。スーパーには『年末セール』の文字が躍っている。どこかふさがちだったわたしの心は、少しだけ踊りだしたような気がした。ただそのダンスは少しばかりぎこちない。

わたし.....

ダンスはうまく踊れない

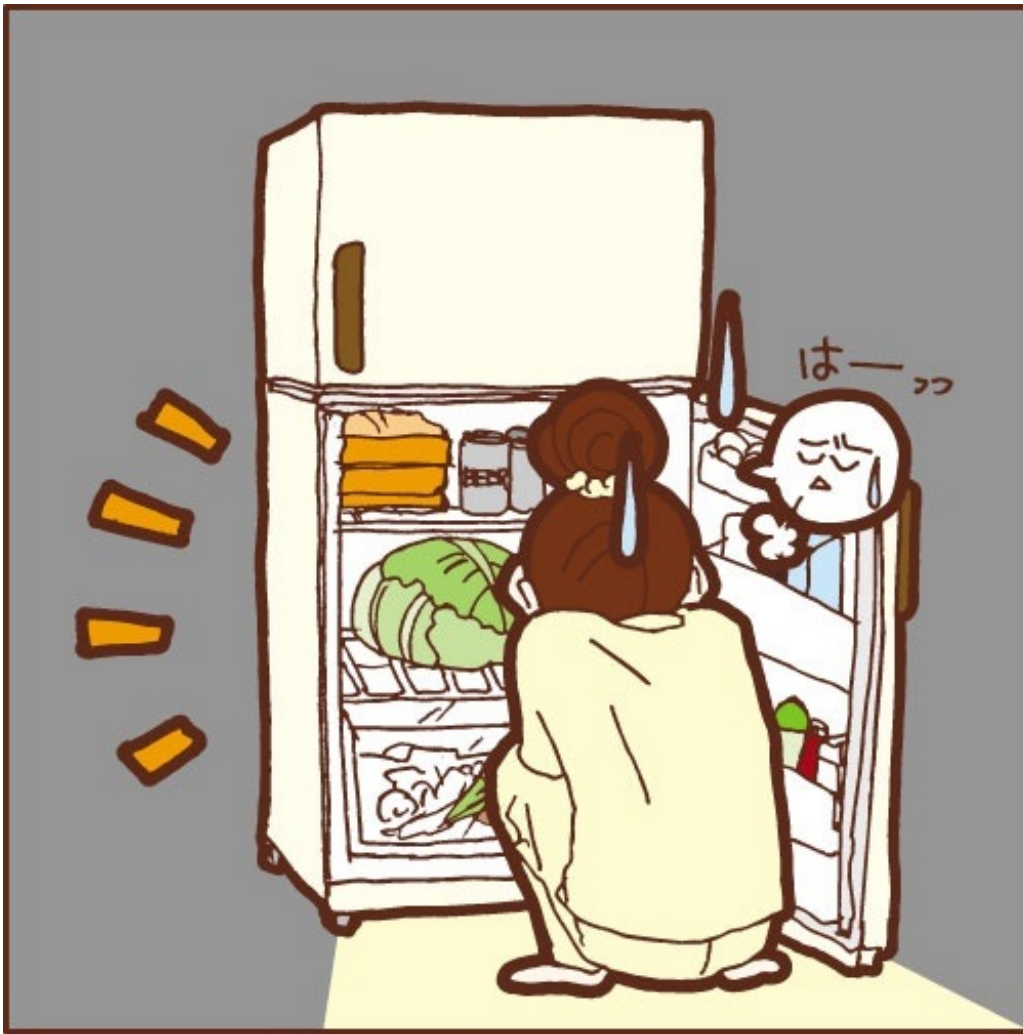
部屋に着き、買ってきたものを冷蔵庫にしまう。

「あー、やだー、わたし、なにこんなにいっぱい買い込んでんのよー」

冷蔵庫の中は一杯になっていた。ひときは目立つのはキャベツひとつたま。

「誰が食べるのよー」

わたしは男の人が食べる姿を見るのが好きだった。だから冷蔵庫の中にはすぐに炒めて食べられるような食材が入っていた。誰かとつきあっているときは.....



「おい、どうした、あたらしい男でもできたか？」

冷蔵庫が不敵にわたしに問いかける。

「もうすぐオレもお払い箱か？」

バターン！

さっきまで浮かれていた自分が疎ましかった。

「なに考えてんだろうー、わたし」

いったいどんなひとなんだろう？

彼のことを考えずにはいられなかった。

その日、寒がりのわたしが部屋の暖房を付け忘れていることに気付いたのは、シャワーから出たときだった。

眠れない夜

「ピピピピ……朝だ、朝だぞ、いつまで寝ている……ピピピピ」

いつもなら目覚ましが鳴り響く前に目が覚める。

ピピピピ……ピピピピ……ピピピピ……

「うわー、もーう、なんて朝なのー」

髪をかきむしりながら、うつぶせの体制になり、枕に顔をうずめる。手が届きそうで届かない。そんな位置に目覚ましを置いておく。年に1回か2回、目覚ましを止めて二度寝をし、化粧もほどほどに家を飛び出すことがある。今日はそんなわけには行かない大事な仕事がある。

「ピピピピ……朝だ、朝だぞ、いつまで寝ている……ピピピピ」

「はい、はい、今起きますよー」

部屋の中の話し相手は、冷蔵庫と目覚まし時計、トースターにやかん、それから——つまりは部屋の中にあるものすべてがわたしの話し相手になってくれる。

「うー、あんまり眠れなかった……」

昨日の出来事。彼との出会いの余韻がワタシに簡単に眠ることを許さなかった。不覚にも彼の顔はあまり覚えていない。まともに見れなかったし、あまりにもすっきりした顔立ちだったので、特徴的をつかめなかった。覚えているのは見上げるほどに大きな体とそれを包み込むとまるでマントのようなトレンチコート、キャベツを驚掴みにした大きな手、そして……

「そしてあの子宮に響くような低い声……やばい、またドキドキしてきちゃったあ」

洗面所にいき、朝がスタートする。洗顔、歯磨き、にらめっこ。

「今日のあたしどうよ？」

バッチリ笑顔で鏡に話しかける

「いいんじゃない？まあ、昨日ほどじゃないけどー」

「どうせ一日ごとにおばさんになってますよーだ」

鏡はいつも正直にものを言う。まるで学生の頃の女友達みたい。

トーストを手早く焼く。

「ガチャン！焼けたぞ！どうだい今日の焼き加減は」

「別に、いつもと同じ……おいしいわよ」

トースターは機嫌が悪いと煙を上げて怒り出す。

台所でお湯を沸かす。

「ピィィー……おい、お湯が沸いたぞー」

やかんがけたたましくわたしを呼びつける。

「あーい、もう……ピィピィピィピィもう少しましな音はでないのかな。あんたは」
コーヒーを流し込む。インスタントコーヒーはまさに人類最大の発明品だ。



テレビをつけて天気予報と今日の占いをチェック。

「可もなく不可もなく……かぁ」

もしかしたら運命の出会いとか、積極的に攻めろとか、変化が現れるような占いがあればと、もう一度あの人と会えるかもしれないと淡い期待をしていた自分に気づき、少し不機嫌になる。

「バッカみたい」

なにも変わらない朝……少くくらくら変わってくればいいのに。化粧も服装もばっちり。鏡の前には昨日とまったく同じ自分がいた。その前も、その前も、そしてこれからも？

「ふー、いきますか！」

別にふさいでなんかない。わたしは何も変わっていないのだから……ただちょっと、ちょっとだけ素敵だなあと思う人が現れて——そしていなくなっただけじゃない。

こんな気持ちにゆれてしまうのは、あいつのせいなのか？

「あいつ、今頃どうしてるかなあ」

携帯電話のアドレスを眺める。あいつと電話をしたのは……あれは確かパソコンがうまく動かないとかで、あいつからかけてきたんだっけ

「まったく、ユーザーサポートじゃないんだからね」

「ゴメン、ゴメン、他に頼れる人いなくて……」

電話口の向こうで、あいつが髪をかきむしりながら、それはそれは立派にはにかんでいる姿が目に見えた。そして『他に頼れる人がいない』という言葉が、わたしの心を揺さぶった。

「もう！こんなことで夜中に電話かけてこないでよね」

ちがう。そうじゃない。わたしは夜中でも明け方でもいいから、かけて欲しいと思っている。だけど、それって何？わたしは何を期待しているの？何を望んでいるの？

「あー、そうか、あれ以来か……」

そうだった『あれ以来』電話で話していないし、『あれ以来』なんだ……眠れない夜を過ごしたのは。

玄関を開けると外はひんやりとした空気に包まれていた。昨日と同じだけど、この空気は昨日ここにあった空気じゃない。

パン！パン！

わたしは両手でほほを叩き、いつもの気合を入れた。高校時代陸上をやっていたわたしは、スタート前にいつもこうして集中してた。いつからか朝、家を出るときは必ずこうやってほほを叩いている。家から駅まで10分。わたしの足取りはいつものようにしっかりと、軽やかにいつものリズムを刻んでいる。スイッチが入ったわたしの頭の中は、今日のクライアントとの打ち合わせのことですでに頭がいっぱいになっている——はずだった。

飲もう！

「あー、もーダメダメ」

わたしは自分のデスクに身をうずめてもがいた。彼の——あのキャベツを驚づかみにしたあの人のことが頭から離れない。背の高いコートを着た男の人の後姿を見るたびに胸がときめいてしまう。

「どーしたんですか、先輩。プレゼン、だめだったんですかぁ」

わたしは親指を突き出しサムズアップポーズを決めた。

「えー、よかったじゃないですか、でも、何か問題でも」

後輩のサッチンは鋭い嗅覚を持っている。それもかなり天然の。

「今晚ヒマか？」

「やだー、そんな先輩からのお誘い断れるわけじゃないじゃないですか〜、で、で、なんですか、なんですかぁ」

「その話を聞きたければあと二人ほど声をかけなさい。ただし……」

「——ただし、男子禁制ですね！」

サッチンの笑顔には時々わたしも惚れてしまう。

「肉だ。肉。肉食おう」



わたしの社内でのポジション——いつの間にか上には役付きのお偉いさんしかいなくなってしまった。リーダーなんていわれるのは、なんとも苦手だけど『姉（あね）さん』と面と向かって言う男子社員は後ろから蹴飛ばしてやった。
——わたしは姉御肌なんかじゃないのに、どうもこの職場はそういうキャラを無理に人に求めてくるきらいがある。

確かにデザイナーとかPC使う仕事の人、文化系が多い。わたしは3年間陸上部に所属していたから、他の人に比べれば、体育会系のオーラが出ているのかもしれない。でも、わたしはそんなに純粋な陸上少女じゃない。

「乾杯！おつかれー！」

女4人。月に一度はこうしてガッツリ焼肉を食べる。

「契約成約おめでとうございます」

今月もどうにかノルマを達成できた。別に会社でノルマを課しているわけではないのだが、予算を持つということは、結局そういうことなのだ。

「まあ、これもアッコのイラストのおかげよ。あの女の子のイラスト。クライアントにすごく評判よかったんだからあ」

アッコはデザイナー。彼女と組んだ仕事の成約率は実に高い。

「さすがはゴールデンコンビ。決める時はきめますねー」

「ちょっと、そのゴールデンコンビっていうの、もうやめてよー」

「えー、なんでですかあ、だって部長はいつもそう呼んでますよー」

部長は管理者としてはそれはそれは有能な上司だ。数々のわたしの失敗をフォローしてくれた。誰からも信頼されている。唯一つ不満なのは、ネーミングのセンス。それは部長の人心を掴む一つのテクニックではあるのだろうが、とても広告を生業としている人間のセンスとは思えない。

「でも、でも、今日はそんな話じゃないでしょうー。先輩なにかあったんですか、もしかして、もしかして」

「コラコラ、そんなに煽るな煽るな。あまり期待されると話しづらくなるでしょう！」

やばい、この攻撃はかわさねば……そのとき救いの声

「すいませーん。カルビ二人前とタン塩二人前追加おねがいしまーす」

別に会話に入るのが嫌だったり苦手だったりするわけではない。キヨミはただただ焼肉が好きなのである。

「せっかく来たんですから、どんどん食べましょうよ！」

わたしは彼女の食べっぷりを見るのが好きだ。わたしも安心して暴飲暴食できる。

「あんたたちこそ、どーなのよ。最近うまくいってるのー？」

わたしは体制を整えて反撃に出た。

「えー、それ聞いちゃいますー。わたし、暴れちゃいますよー」

しめた！かかった。今日はサッチンに酒の肴になってもらおう！

まさかこの歳になってスーパーで見かけた男の人に一目ぼれしたなどと言えない。

やっぱり言えない。

口が裂けても言えないんだから——だから

飲もう 今日とはことん 盛り上がりよう！

LONELY BUTTERFLY

「あれー、なんか今日は先輩の話聞くはずじゃーなかったでしたっけー？」

会計を済ませて店の外に出るとサッチンが急にわたしに絡んできた。少し飲ませすぎたか。

「いーの、いーの。それは今度のお・た・の・し・み」

「わー、やだー、先輩か・わ・い・いい。もう、どーして世の中の男どもは先輩のこと放っておくんですかねー」

おいおい、だいじょーぶかぁサッチン——っていうーか、余計な御世話だぞ、『カッコ笑い』。

「こら、もう、調子に乗って飲みすぎるんだからサッチンはー」

こういうときにキヨミは頼りになる。彼女がどんなに食べようともどんなに飲もうとも、前後不覚になったことを見た事がない。

「先輩、大丈夫ですから、ワタシ、変える方向同じなんで、途中まで送っていきますから」

「そう、もし大変そうだったらタクシー使っていいからね。領収書くれたらわたしが何とかするから」

世の中にはついていい嘘といけない嘘があると誰かが行ってたけど、これは前者のほうだと部長が言ってたっけ

「流石先輩、頼りになるー」

「くれぐれも他言無用だからね」

「あいあいさー」

キヨミの前の彼氏の口癖らしいことを聞いたのは、去年の今頃だったっけ……これはキヨミとワタシだけの秘密。

「じゃーね」

こうして彼女たちと別れた。別れて5分。駅に着く頃にはすっかり余韻は冷めていた。電車に乗って一駅。すでに気分はブルーになっていた。

「素直じゃない……かぁ。なれるわけじゃない。小娘相手に——『カッコ笑い』じゃなく、『かっこわるい』」

少しお酒を入れてみんなでワイワイやれば、気もまぎれると思ったわたしが馬鹿だった——気をまぎらわせる？いったい何から？

わたしは「わたし」に対しても素直になれなかった……だってなれるわけがない。

最寄の駅の改札を出る。家までは10分ほどだが、ここは比較的夜でも人通りが多い街。部屋

の前に着くまでにわたしの胸が苦しくなった回数は3回だった。

「わかっているわ。そう。嘘よ。これはどっちかといえはついてはいけない嘘なの？」

わたしは自分自身に嘘をついていた。

「彼の顔を覚えていないんじゃない。思い出したくないだけ……だって、だってそっくりなんかも。あの人と……」

どこか彼の面影を思わせる男性の姿を見かけるたびに胸が痛くなる。帰り道を急ぐ人影の中に、いつの間にか彼の姿を探してしまう。そしてあの人の影を追いかけてしまう。

「よし、泣くか！」



わたしは本棚から一冊のマンガを取り出した。中学生のとき、友達同士で回し読みをしてみんなで泣いた。このマンガを開くと情景反射的に涙が出てくる。ブルーな気分になった時は、思いっきり泣けばいい。わたしはこうして数々のピンチを乗り越えてきたんだから！

そしてきっと、夢を見るにちがいない——

一人、寂しく彷徨う、蝶々の夢を……

涙の数だけ

「うわー、もうこんな時間」

土曜の朝のわたしは、そう、誰にも見せられない。100年の恋も冷める瞬間は毎週この時簡に訪れる。もっとも今は余計な心配というより無駄な妄想だと目の前のわたしがマヌケな顔でほくそえんでいる。

「あーあー、今日はまた、一段とお美しゅうございますなあ〜」

「う・る・さ・い。黙って仕事しなさい」

鏡の仕事はいつも完璧だ。常にありのままのわたしを映し出す。だから嫌いだ。だから安心だ。

「お腹すいたー」

冷蔵庫の中を物色する。いつもはがらーんとしている土曜の朝の冷蔵庫の中は、相変わらず食材で一杯だ。

「たまにはやりますか」

タマネギ、ニンジン、ジャガイモ……そしてキャベツとウインナー。あー、エプロンエプロンと。

家を出るときにお母さんが買ってくれた寸胴鍋。「こんなの一人暮らしにいらぬよ」というわたしに「なに言ってんの？いつまで一人暮らしするつもりなの？」と茶化したお母さんの横で、どこか不満げにお父さんが鍋を見つめていた。今のところ期待に添えず、こうして一人がんばってます。

「随分と久しぶりだね。お嬢ちゃん。1年ぶりかな？」

「そんなことなあい！パスタ茹でたのは確か……」

「パスタ、ラーメン、うどんにそば……麺類みな兄弟」

コンロの火をつけると鍋は自分の仕事に戻った。

「えーと、確かこんな感じよね」

やると決めたら確かな手際で迷いはない。どうせ食べるのはわたしだけ。少し塩加減を多めに、昨日流した塩分を補給しないと。



「どーよ、なかなかのものじゃない！」

お腹がすいていたからか、塩分が足りなかったからか、今日のポトフはなかなかのものだった。昼真っから料理をしたのは久しぶりだ。気分は上々。ちょっと寒いけど、窓を開けて外の空気を部屋に招き入れた。

「うー、寒い……けど気持ちいい」

全ては「彼」へと繋がっていた、昨日の夜のことも、ポトフと作ったことも、そして気持ちのいい空が広がっていたことも。

「洗濯したら、買い物に行こーかな」

洗濯機は無口だ。黙々と仕事をこなす。掃除機はいつもわたしの鼻歌を馬鹿にする。

「それいつの曲だい？随分懐かしい曲だよね。あー、そこ違うよ。そこはね——」

「もう！邪魔しないでくれるー！せっかく気分よく歌ってるんだから」

久しぶりにおもいきり家事をやった。なんだかウキウキしているわたしに部屋の中も騒がしくなっている。

「なんかいいことでもあったのかしらね？」

「さーて、どうかしらねー」

化粧道具たちはこそこそと噂話をしている。かぼちゃが馬車に変わる瞬間、これは恋の魔法？

それとも天使のキッス？

夢見る少女の出来上がり！ってわたし、何うかれてんだろー……見事にメイクが決まった。こういう日は何かいいことあるかもしれない。

「涙の数だけ女は強く、美しくなるの」

季節外れの冬の蝶々。冬の空がこんなに気持ちがいいだなんて、誰も教えてくれなかった。

「さて、いきますか！」

季節外れの冬の蝶々。冬の空に独りぼっち。誰かに捕まえて欲しいのに。

岡本真夜「TOMORROW」

作詞 岡本真夜/真名杏樹

作曲 岡本真夜

唄 岡本真夜

恋したっていいじゃない

恋したっていいじゃない！

今日のわたしはそんな気分だった。部屋を勢いよく飛び出し、街の中に飛び出した。ついこの前まで疎ましく思えたクリスマスモードの町並みはわたしにも楽しげに見えた。

こんな日は素敵な洋服に出会えるかもしれない。行きつけのブティックをあれこれ見て回る。財布の紐がゆるくなる。「お願いワタシを買って行って」ワゴンセールに出されたかわいいアクセサリーたちがわたしを見つめる。「ワタシあなたに着て欲しいの」店の中の洋服たちがいっせいにわたしに声をかけてくる。

恋したっていいじゃない！

いつかきっと、あなたたちの力を借りて、わたしは素敵な人に出会うの。でもそうね。アナタは少し前のわたしには似合ったかもしれないけど、今のわたしには必要ないわ。あー、見つけた！アナタ、今日のわたしの気分にぴったりよ。

店の中に流れる音楽は、すべてわたしのために選曲されたみたいに心躍らせる。「OKいい？ つぎのリクエストはね。ノリノリのあの曲にして頂戴！わたしの横で楽しげに買い物をしているカップルにプレゼントするわ」

恋したっていいじゃない！

ときは誰の上にも平等に流れていく。早く感じたり遅く感じたりすることはあっても、それはあなたがそう思うだけ。わたしがそう思うだけ。過去を振り返るのも前を向いて歩くのも、それはあなたの、そしてわたしの自由。爪先立ちで背伸びをして少しばかり遠くを眺めてみれば、目の前のつまらないことに心捕われることなんかないんだよ——やさしいあの歌は、わたしにそう教えてくれたっけ？

両手に荷物を一杯持ったわたしは、さながら友達に荷物を持たされてトイレの前で待っているようだった。そんなわたしをあなたは——彼は見つけてくれた。



「やー、すごい荷物だね。友達と一緒にかい？」

神様、いや、仏様、いや、大明神様.....わたし、どうしたらいいんでしょうか？

「いえー、これは、あの一、全部あたしの荷物で.....」

彼は優しくわたしに微笑んでくれた。

「キミは力持ちなのか、それとも.....無鉄砲なのかな？」

今日の日を忘れない。彼のあの笑顔を忘れることなんかできない。

「あ、あの一、この間は.....ありがとうございました。わたしぜんぜん気付いてなくて」

駅前の交差点。信号が青に変わろうとしている——お願いもう少しだけ時間を頂戴。

「ははあ、調子に乗って買い過ぎちゃいました」

ちがう、そうじゃない、他に何か言う事があるでしょう！もう、どうしよう、信号がかわっちゃう。彼の視線が信号機へ写った。

「なんかいいことでもあったのかな？キミ、この町の人？」

「いえ、えーとでも、もう5～6年になります。ここに住んでから.....」

「この辺にコーヒーの専門店とかあるかなあ？引っ越してきたばかりで、まだよくわからないんだ。豆を切らしちゃって.....」

わたしには心当たりがなかった。インスタントコーヒーしか飲まないわたしには、豆のことなどわかるはずもなかった。

「ごめんなさい、わたし、インスタントしか飲まないから.....」

あっダメ、信号変わっちゃったよ

「そう……へんなこと聞いちゃったね。じゃあ」

彼は人波に少し遅れて交差点を渡りだした。わたしはまるで動く事ができない。追いかけるなきゃ、追いかけないと……お願い振り向いて

恋したっていいじゃない！

「あの一、よかったら一緒に探しませんか？」

わたしはとうとう一歩前を出た。フラフラとよろめきながらも、クラクラになりながらも、それでもわたしは一歩前に踏み出した。彼の大きな背中めがけて……

『恋したっていいじゃない』

作詞：渡辺美里 作曲：伊秩弘将 歌：渡辺美里

「いいのかなあ、つきあわせちゃって」

彼は振り向いてくれた。わたしは一生懸命に彼を追いかけた。

「いいんです。その.....この前のお礼もしたいし」

彼はわたしの少し前を歩きながら、振り向き加減でわたしに話しかけてくれた。

「あー、あの時は、そうだね。逆に恥ずかしい思いさせちゃったかな」

覚えていてくれた。それだけでわたしには十分だった。二人にとって本当に一瞬の出会いだったけど、わたしには彼を忘れられない理由があった。彼はわたしが高校生のときに憧れた先輩にそっくりだったのだ。憧れて、恋をして、そして別れた先輩.....でも、彼がわたしを覚えていてくれたなんて、それは軌跡のようなものだと、その時は思った。

「あー、そんなの、ぜんぜんいいんです。あのまま家の鏡を見るまで気付かなかっただらと思うと.....あ、あの一、心当たりはあるんです。コーヒーわたしはあまり詳しくはないんですけど、たぶんわかると思います。こっちです」

今にして思えば、まったく、一体全体すっかり舞い上がってしまい、まるで十代の少女のようだったと、顔を赤らめるばかり.....

駅から線路沿いに5分ほど歩いたところに良く立ち寄る喫茶店があった。そのマスターとは気兼ねなく話せる仲だったので、わたしはマスターに聞けばわかると思った。彼を店の外で待たせて事情を話すとマスターは快くコーヒー専門店の場所を教えてくれた。運良くと言えるのかどうか、それはここから15分ほど歩く場所にある。15分.....あと15分は彼と一緒にいれる。

「えーと、ちょっとここから離れてるんですけど、ちょっとわかりづらいところにあるから、わたし案内しますね」

彼は恐縮した顔をして最初は遠慮をした。それでもわたしは半ば強引に彼を連れて歩き出した。正直わたしも何がなんだかわからなくなっていた。どうしてここまで積極的になれるのか.....どうして素直に気持ちを出せるのか？

「ボクは先月勤め先で急な移動があってね。ついこの前までは名古屋に住んでいたんだよ。単身赴任ってやつさ」

わたしは息が止まりそうになった。街の雑踏がわたしを包み、近づいた彼の背中が急に遠くに見えてしまった。

「あ、それは、たいへんですね、奥様とか、心配されているでしょう」

今にして思えば、よくもそんな言葉ができてたものだと、私自身を褒めてやりたい気分になる。

「まあ、なんというか、そうなんだけど、そうでもないというか……あれ、なんか変な話になっちゃったね」

わたしの頭の中でいろんな言葉がグルグルと回り出した。単身赴任、奥様、名古屋、そうなんだけど、そうでもない……

「ああ、持とうか？いやじゃなかったら……荷物」

わたしはとっさにいたたまれなくなり、混乱し、取り乱してしまった。

「あ、あの……すいません、わたし、あの一、本当にごめんなさい」



わたしは駆け出していた。どこをどう走ったのかわからない。恥ずかしくて、つらくて、情けなくて、ワケわかんなくて、せつなくて……たぶん彼はわたしの背中越しに何か呼びかけてくれたようだった。でもそんな声わたしの耳には届かない。わたしの心には届かない。

気が付くとわたしは部屋のドアを閉めてドアにもたれながらひとり泣いていた。

「何やってるんだろうわたし。わたし何やってるんだろう。わたし、わたし……」

昨日一晩、泣き明かしたはずの涙が今にもこぼれ出しそうになった。

作詞 中島みゆき

作曲 後藤次利

唄 工藤静香

Return to Myself

「どうしたの？浮かない顔して……あんなに元気いっぱいに出ていったのに」

玄関に置き去りにされたブーツがわたしに恨み言を言う。

「ワタシと一緒にいたら、きっといいことあっただろうに」

「うるさい！なんでもないわよ！」

あまりにも苦しい言い逃れにわたし自身も腰が砕けそうになった。

「なんでもないんだから。本当に……」

わたしはヒールを脱ぎ捨てて、買い物袋をテーブルの上に投げ出してその場にしゃがみこんだ

。

「こんなはずじゃなかったのに……」

何が？何がこんなはずじゃなかったの？

「ワタシ、彼は素敵だと思うわ」

テーブルの上の買ったばかりのアクセサリーが袋の中から声を揚げる。

「そうよ。何も置いてけぼりにすることはなかったわね。少なくとも彼には何の責任もないわ」

洋服たちまで騒ぎ出した。

「まだ間に合う。まだ、間に合うよ」

壁にかけた時計が、わたしを諭すように繰り返す。

「まだ、間に合う？まだ、間に合うの？」

わたしはテーブルの上のティッシュを二枚とると思い切り鼻をかみ、そしておもいきり顔を二回パン！パーン！と両手で叩いた。

「まだ間に合う！」

いないかもしれない。いるはずなんかない。でも、もしいたら。もし待っていてくれるのなら……わたしは駆けていた。彼と別れたあの場所へ急がなきゃ。家から駅までは10分、多分駆け足で来たから7～8分くらい経つことになる。今から急いでも、やはり20分近く経つことになる——お願い、彼にもう一度合わせて——わたしは心の中で何度も叫んでいた。

狭い路地から駅へと続く広い通りへと出ると夕方のこの時間、さすがに人通りが多くなっている——まっすぐに走ることはできない——もどかしい。ダメ！こんなじゃ間に合わない！

「あー、キミー！」

駅へと向かうワタシの背中に向かって誰かが声をかけたような……まさか、そんなことが。わたしは振り向いた。どこ？どこにいるの？

「こっちだよー！」

通りの反対側から声がする。あの低くて心の底に響く声——そこには屈託のない笑顔で大きな手を振る、彼の姿があった。彼は車を避けて道路を渡りわたしに駆け寄ってきた。

「えー、どうして？」

思わずそう口走ってしまったわたしに彼は右手で頭をかき、困ったような顔をしながらこう言った。

「あー、えーと、それは、そのー、こっちの話で……いったいどうしたんだい？急に部屋にカギをかけてきたかどうか、心配にでもなったのかい？」

「あー、あの一、ゴメンなさい、本当に、ゴメンなさい……」

わたしは多分真っ赤な顔をしながら、平謝りに謝って、そして、でも心の中ではずっと「ありがとう」って言っていた。それは彼に対してなのか、神様に対してなのか、部屋の中のやかましい同居人に対してなのかわからない。でも、わたしはすごくハッピーだった。

「いやー、いいんだよ。そんなに誤らなくても……まあ、この辺を歩いていれば、店も見つかるかなあと思って……」

そんな軌跡は起きないと思う。多分彼は、わたしの後を追って近くまで来て、そして見失ってしまった……でも何のために？まさか、わたしを探すために？

わたしには、そんなことを彼に聞く資格はなかった。わたしは彼を置き去りにして、逃げてきてしまったのだから……それからわたしたちはマスターから教えてもらった店に向かった。店に着くまでの間のことは、あまり覚えていない。どんな仕事をしているとか、慣れない土地での一人暮らしは大変だとか、どこのスーパーがいつ特売をやっているとか、そんな話をしたと思う。

「あの一、また、お会いできますか？」

彼が10分ほど店の人とコーヒーについてのやり取りをし——わたしには、コーヒーのことはちんぷんかんぷん——目的のコーヒーを手に入れ、店の前で別れようというとき、わたしは思い切って切り出した。

「そうだね。この店を教えてくれたマスターにもお礼を言いたいから、来週あの店で……そう、このくらいの時間に待ち合わせっていうのはどうかな？」

彼は一度腕時計を見て、その時計をわたしに見せた。時計の針は——「4時半……ですか」彼はにっこりとわらい、そして少しばかり慌てた様子だった。

「あー、まずい、布団干しっぱなしなんだ。早く取り込まないと……じゃあ、また来週に」



あー、どうしよう。名前も連絡先も聞いていない.....でも不思議と心配はなかった。
「きっとまた、会える.....」

ともかくわたしは、自分らしさを取り戻した。あの日、先輩と.....あの人と別れてから、恋に臆病になっていたわたしは、重たい荷物を投げ捨てて、彼の胸に飛び込んだ。

冬の暖かな陽射しは、翳りだすとあっという間に暮れてしまい街は肌にさすような冷気に包まれる。でも、なぜだろう。今は少しも寒く感じない。

「あ、いけない！わたしも洗濯物を取り込まないと」

わたしは再び駆け出した。無我夢中で逃げ出し、不安にかられながら追いかけ、そして今、自分自身のために、わたしはわたしに向かって走り出した。

『Return to Myself』

作詞：浜田麻里 作曲：大槻啓之 唄：浜田麻里

一週間……楽しく過ごしている間はあっという間に過ぎてしまう。でも何かを待つにはあまりにも長い時間。わたしはただただ、時間が早く立つことを祈っていた。こんなに何かを待ちどうしいと思ったのはいつ依頼だろうか——彼に会いたい思いを抑えようと、わたしは恋に臆病になっていたわたし自身と向き合うしかなかった。もう二度と彼の前から逃げたりはしない。

あの日、わたしは誰かを好きになることをとても後悔した。別れがこんなに辛いとは、別れがこんなに悲しいとは、別れがこんなに切ないとは——人は愛ゆえに苦しむ、人は愛ゆえに悲しむ。そんなことを本気で思っていた。だからわたしは——だからわたしは恋に臆病になった。

中学のとき、わたしはバスケットボールをしていた。男子は学区内でそこそこの強さだったが、女子チームはわたしが在学中、一度も公式戦で勝つことはできなかった。みんな仲のいい友達だったけど、高校はバラバラになった。わたしは高校に入学すると早速バスケット部に入部しようと見学に行ったが、あまりのレベルの違いに圧倒され、入部するかどうかが迷っていた。

スポーツしてた人が、急に運動しなくなると太るらしいわよ——あれは入学してすぐに仲良くなったミッコの言葉だった。わたしはそれが嫌で、何でもいいから運動部に入ろうと思った。不純な理由だった。

個人競技ならチームメイトに迷惑かけたりしないでできるかも！

わたしの安易な発想とそのときの陸上部の事情が見事に合致した。我が陸上部は慢性的に人手不足。特に目立った成績も残せず、運動系のクラブの中でも御荷物扱いのクラブだとそのときの部長が言っていたのだから間違いないだろう。見学に行ったわたしに一生懸命に勧誘する部長の熱意も会ったのだが、一人グラウンドで黙々と練習をするあの人——先輩の姿にわたしは心引かれた。

入ります。わたし陸上部に入ります。

意外と行動的。



不純な理由に更に不純な理由が重なり、わたしは陸上部に入ることを決めた。そうなのだ。わたしは元来惚れっぼいのだ。

先輩は我が御荷物陸上部のエース。もともと陸上の経験がある人ではなかったのだが、友人とほんの付き合いでこの部に入部したらしい。ところがその友人が交通事故で亡くなり、それをきっかけに友人の志を継いで陸上に打ち込むようになったという、それはそれはまるで少女漫画に出てくる主人公のような設定の先輩だった。

もちろんこれには「尾ひれはひれ」がついていて、交通事故は本当だが命に別状のある怪我でもなければ、選手生命に影響があるほどのものでもなかったらしい。用はそれをきっかけに練習をサボり、幽霊部員になったことを幽霊＝死亡と部長が「おひれ」、副部長が「はひれ」をつけたというのが本当のところらしいのだが、あの人はその話を否定はしなかった。

だってオレがやめたら御荷物どころか本当に廃部になっちゃう。自分が潰したと部長あたりが言いふらすのが嫌だからオレは一生懸命練習しているんだと、そんな話を聞いたのはあの人と付き合ってからすぐのことだった。

付き合ってからしばらくは、平穏で緩やかで、てもあつという間の素敵な時間が過ぎていった

。でも、別れはすぐにやってきた。彼は卒業と同時に札幌の大学に行くことになった。遠距離恋愛はもの見事に——それこそドラマや歌の歌詞のように破局した。尾ひれはひれがつく余地もないくらい。

わたしはあの人に繋がるすべてを否定した。不純なわたし、惚れっぽいわたし、そしてあの人の面影を感じさせるもの全て……でも、時々抑えられなくなる気持ち。本当にこれでいいの？わたしは……わたしは、誰かを好きになれるの？愛せるの？

だからわたしは、あの人とはちがう、弟みたいなあいつに自分を振り向かせようとしていた。自分からはいかない。自分からは誘わない。わたしが好きになるんじゃない。あいつが好きになるの。わたしが愛するんじゃない。わたしが愛されるの。

でも、気付いていた。それは本当にわたしが望んでいることじゃないと。

彼との約束の日までの間、わたしはわたしと向き合い。いくつ物言葉を交わした。もう逃げない。もう逃げ出さない。それを女の意地といえ……そうなのかもしれない。

『LAT43°』

作詞・作曲:吉田美和 唄: DREAMS COME TRUE

『P R I D E』

作詞・作曲:布袋寅泰 唄: 今井美樹